
命がけの反撃

じれったい明け烏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

命がけの反撃

【Nコード】

N4568B

【作者名】

じれったい明け烏

【あらすじ】

大和にある郡山藩で、佐々木駒次郎という男が脱藩した。同僚を誤って斬ってしまったのだ。道場では切り紙の腕を持つ駒次郎。しかし、逃亡の最中、報酬金目当てに駒次郎を追ってきた実戦慣れした浪人者と合いまみえる事となった。

(前書き)

この小説は「命」がテーマの企画に参加し、執筆した小説です。キーワード「命小説」で検索いたしますと、企画に参加した他の先生方の小説を読めます。

大和にある郡山藩士として郡山城の門番を勤めていた佐々木駒次郎という壮年の男がいる。彼は藩校の総稽古所において剣の腕は切り紙であったが、師範を勤める年配の男から度々言われ続けていた点があった。いわく、お主の剣は軽い。いわく、撃剣においてのみ通じる小技ばかり上手くなる。

だが駒次郎は何度言われようと自身の技を見直そうとはしなかった。真剣を使つて斬り合う機会なぞそうそう巡つて来る訳もないだろう、といった考えを持っていた面も確にあつたのだが、それとはまた別に、駒次郎は俊敏な剣の腕を高く評価する者達からもてはやされていて、その事が彼の自尊心を高めていたので、事実にして切り紙となつたのだから悪く言われる筋合いなど無い筈だ、という反発する心もあつたのだつた。

そんな彼がある日の夜脱藩した。刃傷沙汰を起こして逃げ出したのだ。

泰平の世にあつて退屈な見張りの仕事に飽々し、不満を募らせていた駒次郎は、常日頃から同僚に愚痴を溢していた。ある日の夜、その同僚と居酒屋の暖簾をくぐつた駒次郎は、奥の長床几に腰をかけ、酒と煮豆を注文し、そうしていつもの様に飲みながら愚痴を漏らしていた。

そのうち、聞くに耐えなくなつた同僚が突然激昂した事から口論となり、やがてその口論は互いに刀を抜き合わすという所まで発展した。

斬り合うつもりなどはなかつた二人であつたが、揉合いとなつたおり、駒次郎は誤つて同僚を斬つてしまった。脅かすつもりで振つた刀が同僚の腹を斬ってしまったのだ。

彼は真剣を抜いて誰かと対峙する事は初めてだった。当然、人を斬つた事もこの日が初めて。だから駒次郎は柄から伝わってきた生

身の人間を斬った手応え、同僚の腹から噴き出て来る血流、更には、えらい事をしでかしてしまった、という自責の念にかられた事から、蒼白となって店から飛び出し、そのまま郡山から逃げ出したのだった。

郡山を出奔してからの駒次郎は、関所や番所を巧みに避け、山道間道を東に向かってひた走った。特に向かうべき場所などはない。あても無く東へ向かっただけである。

駒次郎は夜通し逃げ続けた。その間、彼の脳裏を駆け巡るのは、手違いとはいえ彼自身の手によって殺してしまった同僚の事ばかりではない。確かに同僚に対しては、気の毒な事をしてしまった、という後悔の念があるものの、長い付き合いという訳でもなく、また、特別仲のいい間柄という訳でもなかったため、どちらかと言えば真剣を使って人を斬った事実自体に強い動揺を覚えたにとどまる。

だから逃げ歩いている間、同僚を斬ってしまった事への動揺は次第に収まりゆき、変わって思いを馳したのは残して来た妻子と両親の事であった。

脱藩は主君を見限ったと見なされる為、重罪となる。駒次郎が出奔した事実は、皆の知るところではない。それだけの事であれば家族に罪が及ぶ事も無いだろうが、駒次郎は人を斬った上で逃げ出したのだ。殺人犯の家族として周囲の者らから疎まれるだろう事は容易に想像がつく。

その事を思うと心が痛む。しかし時既にもう遅い。居酒屋では客の目があった。あのまま留どまっていれば駒次郎は殺人の罪によって下手人、則ち斬首刑に処されるしかない。どの様な形であれ、生きてさえいれればいずれ家族に詫びを入れる機会も巡って来よう。しかし死んでしまえばそれでさえ出来ないのだ。また、詫びを入れたところで、妻子らがこれから味わうであろう責め苦の日々が霧散霧消する筈もないのだが、そう考える事で自身を慰めつつ逃げ続けるのだった。

駒次郎は柳生の里を迂回して大和国から脱し、伊賀を抜け、やがて伊勢を前にして山中で休息を取っていた。時既に三日がたち、道なき道を通つて来た駒次郎の着衣はあちこち擦り切れて汚れも酷い。途中、沢蟹を取つたり、草木を口にしたりして飢えをしのいで来た。何度となく、山を降り、町に出て、小綺麗に身繕いをし直し、まともな物を食べたい、といった欲求が湧き出て来たのだが、その度に、今の姿のまま町に降りると役人の目に止まって捕まってしまういかなない、と自身に言い聞かせて我慢した。

しかしそれももう限界に近い。彼は伊勢にたどりついたら町に出よう、などと考えていた。

捕まるのは承知の上だ。

かの地には観音寺前の大通りを中心に城下町が広がっていて大層栄えている、といった話を聞いた事があつた。その事を思い出した駒次郎は、きつと郡山では味わつた事も無い美味な料理を出す店が軒を連ねているに違いない、といった想像が湧き出て来る。伊勢を目前にして休息を取る彼の期待は、膨れ上がる一方であつた。

ふと、物音が聞こえた氣になつて耳を澄ました。逃亡の最中、彼は幾度となく微かにでも物音を聞いた時には、こうして聞耳を立てていた。多くは、そよいだ風に触れた草葉の擦れ合う音であつたが、今回の場合は様子が違う。山肌を擦る草履の音が混じっている。

人が近付いて来る、と駒次郎は察して律然となつた。役人ではないだろうが駒次郎を追つて来た郡山藩の手の者の可能性は十分ある。駒次郎は草葉の影に隠れ忍び、全神経を足音のする方に向けて聞き入った。

足音は次第にはつきりと聞き取れる様になつてくる。随分と近付いて来た様子に駒次郎の緊張感も高まつてくる。

駒次郎は追つ手でない事を心中祈つた。杣伐りの人足や、道に迷つた単なる旅の者であるかもしれない、といった希望にすがりたく念じ続ける。

駒次郎の目が人影を認めた。草葉を掻き別けて近付いて来る人影。やがて擦り切れた着物を着流した浪人者だという事に気付いて、何故この様なところに浪人なんぞがやって来るのだ？ と、駒次郎の動悸は一層烈しくなる。

浪人者は草葉を掻き別けつつ、辺りを見回して誰かを探している様子だ。その様を観察しているうち、やはり自分を探しに来た輩だろうか？ と、駒次郎は考え、更に、食いぶち欲しさに雇われた輩かも知れん、と思ひ至り、身震いした。

もしそうであれば、突く棒を手にした捕り方よりもたちが悪い、食い詰めた浪人などというのは何をしでかすか分からん連中ばかりだ、僅かばかりの報酬の為には人を斬るのもいとわないだろう、と思考を進めた駒次郎は、更に、仮に雇われてはいないにしても俺の首を手にして褒章金にありつこう、との考えを持っていたところでは何ら不思議でもないだろう、などといった悲観に満ちた事ばかり考える。同僚に手をかけ、己の身ばかり案じ家族らを残して逃げ出してきた悔恨の念が、彼をそうした考えに至らしめているのかも知れない。

やがて、早い事ここから逃げ出さなければ命が危ない、との考えに至り、迫り来る浪人の隙を見逃さんばかりに神経を尖らせて注視した。すると、浪人がふいに屈み込んだ。そこは休息を取る前に駒次郎が用を足したところである。

今だ、と思つて駆けようと立ち上がった駒次郎。踏ん張った一瞬間、迂濶にも足を滑らせて尻餅をついてしまった。

しまった！ と駒次郎が思つた直後、何奴っ！？ という誰何とともに浪人が走り込んで来た。

慌てて立ち上がるうした駒次郎だが、草葉を別け入つて来た浪人と目が合った瞬間強張つた。見つかつてしまった、という思いもさることながら、人を斬つた事のある者が持つ陰惨な気配を感じ取つて気圧されたのだ。

「駒次郎つてのはお前の事だな？」

あざとい片笑みを浮かべて問うてきた浪人の表現は、狙っていた獲物を見付だした獰猛な野犬さながらに舌舐めずりせんばかりだ。

「駒次郎？ そんな奴あ知らん」

「しらばっくれんじゃねえ！」

浪人は激昂したのち懐から紙を一枚取り出し、駒次郎へ見せるように突き出した。かの者を捕えてきた者には金十両を渡すものとする、といった内容の文が記載されてある人相書きであった。

「郡山城下で配っていた手配書よ。この面あてめえ以外何者でもねえだろ。どうだ？ ん？」

下卑たニヤケ面をする浪人者が持つ手配書を眺め見て駒次郎は、もう駄目だ、となかば観念した。実戦慣れした手練であろうこの男の手から、逃れえぬ事は明白であった。

しかし突然、抜けよ、と浪人者が言った。咄嗟には判断つきかねる駒次郎に苛立った浪人者が、抜けつつつてんだろ、と声を荒げる。

「抜けつて……刀をか？」

「それ以外何がある。おら、早く抜けよ。でないと今すぐ叩つ斬つてやるぞ」

浪人者の怒気に気負された駒次郎は、いかがわしい思いを抱きつつも立ち上がり、腰帯に差していた刀の鯉口を切ると、すらりと抜いた。誤って同僚の命を絶った刀身が、山奥にて再び採光を放つ。

「ようし、それでいい」

浪人者は満足そうに頷いたが、駒次郎には意図が見えない。何がしたいのだ、との駒次郎の思いとはよそに、浪人者は無言のまま刀を抜いた。

斬り合いたいのか？ という考えが駒次郎の脳裏をよぎり、鼓動が一層早くなる。

しかし、さきの手配書には

「捕えた者には金十両」

と書いてあった。報償金目当てであるのは明白だ。斬り殺そうとまでは考えんだらう、といった甘い考えが駒次郎にはあったのだが、

何のてらいも無く刀を抜いた浪人に、恐ろしい殺気を感じ取った。

駒次郎は思わず、斬るのか？ という問掛けを口にした。浪人は、
「そうだ、と駒次郎を不気味に見据える。そうして駒次郎に、抵抗し
たならばこれを斬って藩に首を持って来い、とのお達しが出ている
事をながば笑い、そうする事で圧っしながら伝えた。」

駒次郎は身がすくんだ。八双に構えた浪人が腰を落とし、ゆつくと間を詰めて来る。殺氣づいた浪人の眼光に氣後れした駒次郎は、刀を正眼において後退する。

殺される。恐怖した駒次郎の口から、齒の噛み合わさらない音がする。そのままじりじりと後退する駒次郎。

「観念しろや駒次郎さんとやらよお」

浪人者はニヤケた笑みを張り付かせたまま威嚇し、直後一步踏み込んで斬り付けてきた。

ひいつ、という声が漏れた駒次郎だが、咄嗟の打ち払いで何とか退ける。浪人者が打ち込んできた瞬間、驚きのあまり目を閉じる始末だから、まさに偶然の産物である。

この一合わせて技量の差異は明白であった。

駒次郎が単なる木偶でしかない事を浪人者はすぐに察した。

浪人者が気合いの打ち込みを繰り返した。振り被るなり真つ向から斬り下ろす。体を捌いて辛うじて避ける駒次郎。追い掛ける様に打ち振るう浪人者の刀を、駒次郎は掬い上げて跳ね返す。実戦経験の無い駒次郎であったが、次から次へと打ち込んでくる浪人者の斬り付けに、何とか喰らい付いてしのいでいく。

道場剣法で培った体用。恐怖して畏縮してはいるものの、切り紙者として敏捷な動きみせる駒次郎。しかし、反撃の去に出る事は迂濶には出来ない。

畏縮したままでは体の根ざさない小手先の動作となっていた。隙をみせる形となり、虚しく斬られるのは目に見えている。だから防衛に徹するしかないのである。だがそれも、目前の死が先送りになっただけであるかの様に、次第に圧されていくのだった。

かわされる度に浪人者から気合いの乗った打ち込みが繰り出されてくる。着衣のあちこちが薄く切れる。するどい突きが小鬘をかすめる。いよいよ捌き切れなくなって来た時、おのれっ！ という浪人者が発つした気合いの掛け声とともに激しい斬り下ろしが駒次郎を襲った。

駒次郎の肩先から血飛沫が舞った。身を翻して避けたつもりが、避けきれずに斬られたのだ。

しかしその途端、激憤した駒次郎が反撃に出た。浅手ではあつたものの、己の血を見た瞬間、このままでは殺られてしまう、という思いに駆られた事によって、反つて気が激しくいきり立ったのだ。

防戦一方であつた駒次郎の必死の袈裟斬り。浪人者は驚きはしたが、これを打ち払うつもりで合わせに行く。

しかし、駒次郎の捨て身の一撃は、気が激した事で奥した心が打ち払われ、鋭い打ち込みとなり、受けるつもりだった浪人者の刀を逆に弾き返した。

心気力一致した駒次郎の剣。

目を見張る浪人者。直後、駒次郎は鐔本で浪人者の頭をかち割らんばかりに大きく踏み込む。気が激するまま浪人者の股下にまで足を踏み入れた駒次郎は、そのまま右袈裟に斬り下ろす。

浪人者からすると、目前に駒次郎の顔面を見た直後、己の体が斬られた形だ。やられた、という思いが脳裏を走るより先に、激しい痛みが彼を襲った事であろう。

浪人者の体から血流が迸った。次いでがっくりと膝をつき、刀を落とし、ついには体が崩れ落ちた。うつ伏せに倒れた浪人者の体の下の地面が、流れる血で染まっていく。残心のままその様を見る駒次郎の肩が、荒い呼吸の為に上下している。同僚を斬った時はまた違つ手応えが、駒次郎の手に残っている。

生き延びたのか？

駒次郎は、信じられないといった風に茫然としていた。自発的に人を初めて斬った。これが真剣の斬りあいなのか、と徐々に実感せ

られてくる。

やがて呼吸も落ち着いてくると、残心を解き、血振りし、納刀した。

道場での剣術とは違った真剣での斬り合い。道場では爪先だって半身となり、手先ばかりの霞め打ちであった事が今に更ながらに思い出される。ようやく師範の言っていた意味がわかった気がする。心であり、気力。それなければ、奥してしまつて斬りあうには至らないのだ。

駒次郎は仏となつた浪人者を一瞥すると、その場を立ち去つていった。これから先、幾度もこうした手合いと斬り結ぶ事になるだろうが、どんな事しても斬りふせてやる、といった気概を持ち合わせねば、命はいくつあつても足りないのだ。

その事を察した駒次郎は、いつか敵と相對した時、直ちに斬りかかる去に出るだろう。そうする事で、己が生きる事に繋がるのだ。

駒次郎の逃亡は今尚続けく。家族と合いまみえるまで。

了

(後書き)

投稿後に気付いていた修正すべき点を手直ししました。また、評価コメントを頂いて参考にし、それを自分なりに加筆修正してもみました。多分、多少はよくなっているだろうとは思いますが、よろしければまた指摘あればコメント下さるとありがたいですm (((

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4568b/>

命がけの反撃

2010年10月8日15時34分発行